シリーズ 城

第五十四回 七尾城

～謙信も絶賛した天宮～

深草 祐一

全国に名城とされる山城はいくつかありますが、能登の七尾城は、かの上杉謙信が「絵像に写し難き景勝までに候」と書状に書いたほどの眺望で有名です。そして、七尾城は、単に戦になった際に立て籠もるための、いわゆる「詰めの城」としての山城ではありません。山の上にありながら、平時における政務や日常生活を行える御殿のほか、家臣の屋敷も建ち並んでおり、能登守護畠山氏の下で京文化を礎とした地域独自の文化が花開いた場所でもありました。また、七尾城は、上杉謙信が織田の大軍を打ち破った手取川の戦いが起こる原因となった城でもあります。

能登守護畠山氏

畠山氏といえば、畠山基国が足利義満の信任を受けて室町幕府の管領を務め、細川氏、斯波氏とともに、三管領家と言われるようになった名門です。基国は越前・越中・河内・山城・紀伊守護を歴任し、能登の守護も兼ねることになりましたが、その次男が能登を譲り受けて分家したのが能登畠山氏の始まりです。当時の守護は、領国経営は守護代に任せて京に居るのが通常でした。しかし、応仁の乱の後、各地の守護は幕府の権威ではなく自らの実力で領国を治めてゆかざるを得なくなり、それぞれの領国へと下向していきます。そして、当時の能登守護畠山義統も領国である能登へと下向しました。能登府中の守護館に入った義統は、ここで連歌会を開き、今に残る「賦何船連歌」を詠むなどしており、ここから能登畠山文化が花開くことになりました。しかし、その義統の没後、守護代の遊佐氏が義統の次男を擁立して家督を継がせるも、一旦越後に逃れた長男が8年後に守護に返り咲くなど、政情が不安定になっていきます。その頃、防御力に優れた山城が築かれ、能登畠山氏の拠点は七尾城へと移りました。次代の畠山義総の30年間は、「賦何路連歌」、「賦何人連歌」が詠まれるなど、比較的安定した時代が訪れたようです。しかし、義総が没すると、畠山七人衆と呼ばれる重臣らが領国支配の実権を握り、能登畠山氏の当主の座は重臣の勢力争いに左右されるようになります。重臣によって当主が追放され、その後を継いだ者も不慮の死（一説に毒殺とも）を遂げ、その後継者も早逝して、まだ幼少の春王丸が当主を継ぐという、極めて不安定な状況に陥っていきました。

七尾城本丸からの眺望

上杉謙信の介入

このような畠山家中の混迷をみて、越後の上杉謙信が動きます。謙信といえば、伝統的な権威をないがしろにして世の安定を乱す行為を嫌ったことで知られ、表向きは能登守護家の混乱を収束させるといったところでしょうが、実はこの頃、織田信長が急激に勢力を伸ばしており、いよいよ圧迫を受けた石山本願寺が上杉謙信に助力を求めてきていました。それまでは、加賀や越中の一向一揆を警戒していた謙信でしたが、織田の勢力拡大を押さえ込むためにも、一向宗勢力と手を結んで北陸方面を平定しておくことが重要だったの

です。2万の軍勢で能登へと侵攻した上杉軍は、支城を陥落させ、七尾城を囲みました。一方、謙信の介入を嫌った畠山の重臣たちは要害の七尾城を堅く守り、謙信が関東情勢を気にして一時帰国した際には、支城の一部を取り戻したりもします。しかし、謙信が再出陣してくると、全軍を七尾城に集め、領民も城に引き入れて、総動員で立て籠もりました。そして、かねてから誼を通じていた織田信長に助けを求めました。これに応えた信長は、北国方面司令官の柴田勝家を総大将とし、丹羽長秀、滝川一益、羽柴秀吉らの軍勢も加えた総勢4万の大軍を能登へと進発させました。このため、戦国最強の呼び声高い上杉の軍勢と、長篠で武田勝頼を破り破竹の勢いに乗る織田の軍勢とが、直接対決する状況が生まれたのです。

手取川の戦い

七尾城救援のため北国街道を急ぐ織田軍でしたが、謙信と結んだ一向一揆勢の妨害に遭い、思うように進軍できませんでした。さらに畿内で松永久秀の離反が起こり信長本隊の出陣が取りやめになったほか、途中で柴田勝家と羽柴秀吉が意見対立を起こして秀吉の手勢が独断で引き返すという、全体の士気を低下させる事態も起こります。それでも織田軍は、方々の村を焼き払い、手取川を渡って加賀北部へ進軍しようとしていました。しかし、その頃には、七尾城は謙信の手に落ちていたのです。実は、城内に人を入れすぎたために疫病が発生し、能登畠山氏最後の後継者だった春王丸が死去してしまうなど不安が広がっており、もともと親織田派の長氏の増長をこころよく思っていなかった親上杉派の遊佐氏と温井氏が謙信に内応したのでした。さて、柴田勝家が救援すべき七尾城陥落の急報に接したのは、難所である手取川を、ほぼ全軍が渡り終えたところでした。元々遠国であった上に、対立する一向一揆の勢力下では情報収集能力が相当に低下していたのでしょう。逆に謙信は織田軍の動きをしっかりと掴んでおり、七尾城開城後ただちに進発すると、織田軍が手取川を渡った頃には、数km手前の松任城に入っていました。そして、謙信自ら直卒部隊を率いて織田軍に夜襲をかけます。七尾城陥落の知らせを受けて急遽撤退を開始していた織田軍は大混乱に陥りました。織田軍は千余を討ち取られ、その他はことごとく雨で増水した川へと追い落とされて人馬ともに押し流されたといいます。後にこの時のことを詠んだ落首があります。「上杉に逢うては織田も名取川　はねる謙信逃ぐるとぶ長」実際にこの場に織田信長が出陣していた訳ではありませんが、織田軍との直接対決を制した謙信は、書状で、「信長と雌雄を決する覚悟で臨んだが、案外弱く、この分だと今後の天下までの戦いも簡単だ」という旨のことを書き送っています。七尾城に戻った謙信は奥能登の松波城を落として能登をほぼ平定しました。冒頭に紹介した謙信の書状はこの時のもので、「聞きしに及び候より名地、(加) 賀・越 (中)・能 (登) の金目の地形と云い、要害山海相応し、海頬嶋々の躰までも、絵像に写し難き景勝までに候」と、今回平定した国々を見渡せるその眺望を絶賛しています。

現在の手取川

さて、織田の大軍を退け、北陸を平定した上杉謙信でしたが、一旦越後春日山城へ戻り、次の出陣を計画したところで突然倒れ、そのまま急死してしまいました。武田信玄といい、上杉謙信といい、織田信長を窮地に追い込んだところでいずれも急死しており、歴史のドラマを感じるものがあります。

その後の七尾城

謙信亡き後、七尾城は再侵攻してきた織田軍の手に落ち、その後、能登は、前田利家に与えられました。利家は、不便な山城を使わず海岸近くの高台に小丸山城を築城して拠点としました。現在の七尾市街は、小丸山城の東側の海岸線一帯に広がっています。市街地からさほど遠くないところにある七尾城址は、山の上まで道路が整備されており、登山をせずとも見学に行くことができます。石垣技術の本格発達以前のものではありますが、階段状にかなり高く石垣を構築した本丸周辺のほか、切り立った尾根筋の上を削平地とした二の丸、三の丸や重臣の屋敷跡など、広範囲にわたって城郭遺構が残っています。ここに、それぞれ立派な御殿や屋敷が建ち並んでいたというのですから、往事の能登畠山氏の威勢が偲ばれます。何より、七尾南湾の先に浮かぶ能登島の絶景を是非見て頂きたいと思います。